様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８０２５９

研究課題名（和文）イギリス経済学における初期制度化の系譜

研究課題名（英文）The Formation of the Institutionalization in the British Economics

研究代表者
只腰　親和（Tadakoshi, Chikakazu）

中央大学・経済学部・教授

研究者番号：６０１７９７１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，アダム・スミス以降の19世紀前半期イギリス経済学の歴史的変遷を，主として東インドカレッジ（マルサス，ジョーンズ，ステファン）とオックスフォード大学（ウェイトリ）に焦点をあてて，ディスプリンとしての経済学の形成過程として研究するものである．本研究の成果は，それぞれの大学の「経済学講義」の開講までの経緯，背景と，講義の特徴，内容，意義，そしてそれらの歴史的連関の一端を明らかにしたことである．

研究成果の概要（英文）：This study seeks to clarify the contents, features, and backgrounds of teaching political economy at the East India College and Oxford University in nineteenth century England. Malthus, Jones, and Stephen delivered lectures on political economy and history at the College, which had the purpose of providing recruits for the civil service in India. On the other hand, Whatley, who was one of the earliest professors of political economy at Oxford University, had the responsibility for establishing political economy as a discipline in England.
This study focuses on the professors' teachings of political economy at the college and university, and demonstrates the significance of their views on political economy. In order to attain the aim, we surveyed many manuscripts collected in the British Library, Bodleian Library, and Cambridge University. We also shed light on the features of Dugald Stewart's and James Mill's view on political economy, as precursors of the above economists

研究分野：経済学史

キーワード：経済学史　経済学の制度化　イギリス経済学

１．研究開始当初の背景

これまでの経済学説史・経済思想史の研究では，各時代の経済的社会的背景に注目し，その時代を特徴づけるトピックとの関連で，それぞれの時代の有力な経済学者の経済学を取り上げてそれを分析する手法が主にとられてきた．その主題は，自由貿易対保護貿易，失業，貧困，労働問題等によって例示されるように，時代によって異なるいくつかの経済的・社会的問題が対象にされてきた．

しかし，経済学が，近代社会諸科学の中ではかなり早く制度化が実現した言葉の真の意味でのひとつのディスプリンであった史実も忘れられてはならない．つまり経済学の歴史を正しく捉えていくためには，上のような旧来の研究手法にくわえて「大学における経済学」というテーマは避けて通れない課題である．

その点についてイギリスに焦点を絞って考えると，19 世紀後半のマーシャル以降の経済学史に関してはそのような問題関心もそれなりに見受けられる．しかし，アダム・スミスが『国富論』によって礎石を築いたことが契機となって始まった 18 世紀後半以降の近代の経済学の歴史・思想史において，イギリスの大学と経済学との関連については，十分に明らかにされてこなかった．

２．研究の目的

（1）従来の経済学史・経済思想史研究において，アダム・スミス以降の 19 世紀前半期イギリスの「大学と経済学」の関係は，1.「研究開始当初の背景」で述べた理由から，研究者の関心の外におかれてきた．この時期は経済学の拠点がスコットランドからイングランドへ移行した時期である．そこで本研究は，そうした経済学の歴史的変遷を，東インド・カレッジ（マルサス）とオックスフォード大学（ウェイトリ）に焦点をあてて，ディスプリンとしての経済学の形成過程を分析対象としている．本研究では，それぞれの大学において開講された「経済学講義」の開講までの経緯，背景と，その内容，意義，ならびに二機関での講義の歴史的連関を明らかにすることを目的にしている．

(2)これら２つの大学と経済学との関連についての研究は，個別のテーマで行われるものではない．東インド・カレッジからオックスフォード大学の経済学講義に至る，各時代における経済学のもつ意味や影響を精査し，さらにその上で，その連続性と断絶性ならびにイングランド国内における経済学の発展過程を明らかにすることを目的にしている．

そこで，本研究では，「大学と経済学」との関連で，マルサスやウェイトリだけでなく，思想史の影響関係で彼らと結びつきの強いデュガルド・スチュアート，フランシス・ホーナー，ジェイムズ・ミル，リチャード・ジョーンズの経済・社会思想を明確にすることも目的にしている．

３．研究の方法

（1）本研究の考察の論点については，アダム・スミス以降の経済学史・経済思想史分野のテキストに加えて，大学史や教育思想史，知性史，政治思想史などのコンテキストを多く扱う．またそれと同時に，それぞれの大学と経済学講義との関連を追究するためには，この点に関する未公刊の「書簡」や「手書き草稿」などの大量の一次資料を紐解く必要がある．さらに，スミス以後のイギリスの諸大学の経済学講義が行われる背景やプロセスなどについても研究の幅を広げなければならない．

（2）（1）で述べた一次文献の資料分析を行うためには，イギリスの図書館などに出向き，日本では入手の困難な未公刊テキストだけでなく，マニュスクリプト類をも調査しなければならない．より具体的には，大英図書館，ケンブリッジ大学図書館，ボードリアン図書館（オックスフォード大学）などに所蔵されている貴重資料を効率的に資料調査と資料分析を行う．そして，現地での資料収集においては，複写やマイクロフィルムで注文・依頼し，帰国後に自らの PC などで資料の分析を行う．この資料調査による資料収集に合わせて，それらの書簡やマニュスクリプトの内容を逐一吟味していき，それぞれの文献の有する学術的価値について検討する．

４．研究成果

（1）荒井は，東インド・カレッジにおけるトマス・ロバート・マルサスの経済学講義の特徴と講義の設置プランの経緯を明らかにすることを目的とした．この目的を遂行するために，平成 25・27 年度に現地の英国で資料の徹底調査で収集した資料分析を集中的に行った．特に焦点を当てて考察したのは，大英図書館に所蔵されている 1806 年から 1834 年まで行ったマルサス講義を聴講した全学生の成績表，東インド・カレッジに関する未公刊の学位論文（ハートフォード州立図書館所蔵），ボードリアン図書館に所蔵されている東インド・カレッジの関連資料や 1808 年の同カレッジにおいてマルサスが作成した試験問題である．

（2）益永は，東インド・カレッジにおける経済学教育の内容と特徴の解明に努めるとともに，1835 年からマルサスの後任として同カレッジ教授となったリチャード・ジョーンズの経済学講義の研究に焦点を当てた．その結果，従来ほとんど注目されてこなかった穀物の自由貿易への移行に伴う諸問題が彼の講義で少なからぬ重要性をもって論じられ

ていたことを明らかにした．その成果は，共同研究者の荒井氏とともに，米国経済学史学会大会（於デューク大学）で報告されている．また，ジョーンズの講義において，前資本主義社会と資本主義社会を対比しながら展開された地代の歴史的考察についても明らかにしている．

（3）只腰は，益永と荒井によるそれぞれの研究をとりまとめ，本研究全体の計画，構成ならびに方向性を総括した．そのために，研究分担者の個人報告をとりまとめるための研究会の開催や各論文のチェックなど，本研究の具体的な成果に結びつくための運営ならびに本研究全体の会計業務にも尽力した．

個別の研究では，19 世紀前半におけるイギリス経済学における大学での経済学講義の発生・展開に，人脈面で大きな役割を果たしたデュガルド・スチュアートとジェイムズ・ミルの経済学の方法論について考察した．これらの研究を遂行するうえで，先行研究の中で十分に取り上げられてこなかった The British Review and London Critical Journal, London Review 等の当時の重要ジャーナルを参照し，彼らの経済学方法論の特徴の解明に努めた．

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 只腰親和「デュガ・ステュアート道徳哲学における経済学方法論の生成」，『経済学論纂』（中央大学），56 巻 3・4 合併号，査読無し、2016 年 3 月，pp.309-332

②益永淳「ジェイムズ・ミルの租税論-リカードウからの離反と継承」，『経済学論纂』（中央大学），56 巻 3・4 号合併号，査読無し、2016 年 3 月，pp.447-463

③荒井智行「D.スチュアートの過剰人口論――アダム・スミスの中国論との比較を中心に」，『経済学史研究』（経済学史学会），第 57 巻第 1 号，査読有り，2015 年 7 月，pp.73-95

④荒井智行「デュガルド・スチュアートの経済学研究とその意義――アダム・スミス以後のスコットランド経済学研究」，『経済学論纂』（中央大学）第 55 巻第 2 号，査読無し、2014 年 11 月．pp.75-99

〔学会発表〕（計４件）
①益永淳，荒井智行 'Lectures on Political Economy at the East India College in the Nineteenth Century: T. R. Malthus, R. Jones, and J. Stephen' 2016 年 6 月 18 日（at Duke University, USA）

②荒井智行「地金論争期におけるジェフリ，ホーナーとマルサス」，経済学史学会大会 2015 年 5 月 31 日（於滋賀大学）

③只腰親和「スコットランド道徳哲学の方法論的遺産－デュガルド・ステュアートの経済学方法論」，日本イギリス哲学会第 39 回研究大会，シンポジウム「イギリスにおけるモラル・フィロソフィーの展開」，2015 年 3 月 28 日（於甲南大学）

④ 荒井智行 'Dugald Stewart on Education: The Perspective of Political Economy in the Early Nineteenth Century Scotland', History of Economic Thought Society of Australia Conference, 2014 年 7 月 12 日（at Auckland university）

〔図書〕（計７件）

①只腰親和「ジェイムズ・ミルの経済学方法論」
益永淳編『経済学の分岐と総合』，中央大学出版部，2017 年 1 月，pp.125-156.（総頁数 358）

②益永淳「リチャード・ジョーンズの地代論― 一国の租税支払い能力の視点から」，益永淳編『経済学の分岐と総合』，中央大学出版部，2017 年 1 月 pp.157-92（総頁数 358）

③荒井智行「デュガルド・スチュアートにおける経済学の目的と多様性――ジェイムズ・ステュアートの多様性論との関連で」，益永淳編『経済学の分岐と総合』，中央大学出版部，2017 年 1 月，pp.93-123.（総頁数 358）

④荒井智行「地金論争期におけるジェフリー，ホーナーとマルサス――ホーナーの金融思想に与えたマルサスの影響を中心に」，柳田芳伸・山崎好裕編『マルサス書簡のなかの知的交流――未邦訳史料と思索の軌跡』，昭和堂，2016 年 11 月，pp.113-139.（総頁数 313）

⑤荒井智行『スコットランド経済学の再生――デュガルド・スチュアートの経済思想』，昭和堂，2016 年 2 月，（総頁数 280）

その他 2 件

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
只腰　親和　　（TADAKOSHI, Chikakazu）
中央大学・経済学部・教授
研究者番号：60179710

(2)研究分担者
益永　淳　　（MASUNAGA, Atsushi）
中央大学・経済学部・准教授
研究者番号：00384727

荒井　智行　（ARAI, Tomoyuki）
東京福祉大学・国際交流センター・特任講師
研究者番号：70634103

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）